

もえらず、其時百姓の乗來し馬に、いろ／＼の物取付、百人計打立ちて、紀伊川を涉り、橋本山より木のめ路にかゝり、大坂にぞ行たりける。道々にて、百姓はみな九度山にゆきぬ、残りし女わらべども、信仍が鎗眉尖刀の鞘をはづし、鐵炮に火なはをはさみ、もし押止る者あらば、忽討殺すべき體を見て、せんかたなし、九度山に酔伏たる者ども、夜明て見れば、眞田はなし、いかにと問ば、昨日まか／＼の有様にて、河内路に赴きたりといふ、欺れしと悔めども、力及ばず、

〔藩翰譜十二下〕織部正古田は古き玩器の全きをば餘りに思ふ所なしとて好まず、されば書畫

やうの物をも、かしこを切りこゝを斷ち、凡の茶具をも多くは損ひ毀りて、又補ひ綴りてぞ用ゐける、世の人皆興ある事に思ひ學びて、世に全き者のなからんとす、松平伊豆守信綱の實父大河内金兵衛久綱、常にかたへの人に言ひしは、必禍ひに罹りて死すべき者なりといひき、其後此人罪蒙りて誅せられしかば、人々大に驚き、如何で兼てより斯くは相知れるぞと久綱に問ふに、古の寶器と聞えしも、世々の亂に失せて、今ある所の物は、皆神佛の護持してこそかく世には残るらめ、それにおのれ一人の好に隨ひて、損ひ破ること、必鬼神の憎む所にやあるべき、さらば其人も又身を全くして終る事を得べからずと思ひきと言ひしとなり、

〔武野燭談十七〕松平伊豆守信綱出身來由并松平右衛門大夫正綱事

慶長年中、御城回祿の時、御門燒塞り、御本丸の總女中可立退了簡ナカリシヲ、此右衛門大夫綱正下知シテ、御壘共ヲ御堀へ投入サセ、塀ヨリ布ヲ引下テ女中ヲ下シ、又大幕ヲトモニ引ハヘテ救ヒ出シ、急火ノ難ヲ助ケタリ、

〔藩翰譜七〕此年慶長十五年十月九日、駿河の國府の城、故あつて殿舎悉く燒失せぬ、直寄○火救うて功ありしかば、明る十六年地加へ賜つて賞せらる、○註

直寄眞先に御寶藏に馳せ來て、火を救ひしに依て、數の御寶多くの金銀も燒けず、又火救ふべ